

# まえがき

とうとう、今回ご紹介する「Primary Sheets-c」で「Composer Starter Guide」の最終集となります。

本テキストでは、実践的な、“歌モノ”の枠に囚われない、様々なジャンルの音楽にも対応できる知識が身に付くよう考慮されたテキストになっており、そのため、本テキストを習読されると、例えば、巷で人気の音楽であっても、とてもつまらなく怠惰な音楽に感じてしまって、更に自分好みに編曲したり…。なんて事になってしまう危険性はかなり有ります笑。

内容を概説すると、現状の商業音楽は勿論、19世紀中頃までのスタンダードな音楽（俗に言うロマン派）のコードワーク（ビックネームな作曲家達の独創的な用法は除く）を中心に構成されていますが、19世紀末～20世紀初頭あたりの調性感を持ちつつ、Major・Minorにカテゴライズされない近代音楽であっても、対応できるヒントも少しだけ盛り込んでみました。

更に近代の作曲家達がかつて夢中になった、Jazzのイディオムも多少感じられたりと、内容は中級～上級者向けとなっておりますので、よくわからない！という方には拙著「Composer Starter Guide・Primary Sheets-a及びb」の再読、復習をお勧めします。

より広義においての劇伴音楽や自己の音楽性の拡充を図るのであれば、調性や拍子に制約されない音楽に接してみたり、「対位法」や「楽曲分析」に取り組んでみることは必須とは言えるのですが、まずは例え駄作になってしまっても、作曲してみる、何曲も書いてみるのが一番大事だと思います。そして恥ずかしがらずに、出来た作品を出来るだけいろんな人に聴いてもらいましょう。

調性のない音楽が生まれてから、もうかれこれ100年以上経ちますが、実際に今尚「市民権」を得ているのは「調性（感の有る）音楽」であって、そういう意味でも、本テキストの存在価値は有る！と思いたいところです。ま、著者本人は「聴く」分に限って言えば、現代音楽が大好きであったりするのですが…。

誇大妄想癖の発露として覚悟の上で言うと、現状の音楽レベル（作り手も受け手も）の底上げと、真に聴きごたえのある音楽に遭遇する確率を上げたい！というエゴが、本テキスト作成の原動力になった事は否めないし、創作の幅の可能性を広げてくれる一端になってくれたなら…というのはあながち「妄想」では無い、筈！

# もくじ

01 同名調の活用 ＜Major or Minor?＞	.....	1
02 テンションノート ＜音楽のTPO＞	.....	3
03 VIIのコード② ＜裏コード＞	.....	5
04 強進行の活用① ＜結局のところ...＞	.....	7
05 強進行の活用② ＜定型と経過音＞	.....	9
06 オルガンポイント ＜何故「オルガン」ポイント?＞	.....	11
07 ヴォイシング④ ＜クリシェと変位和音＞	.....	13
08 様々な音階① ＜「古い」けど「新しい」＞	.....	15
09 様々な音階② ＜「クラシック」も民族音楽?＞	.....	17
10 エンハーモニック ＜ドミナントとIIIのコード＞	.....	19
11 リハーモナイズ①	.....	21
12 リハーモナイズ② ＜メロディーとリハーモナイズ＞	.....	22

## 08 様々な音階①

## 音階 (Scale) と旋法 (Mode)

音階：明確なTSD機能を軸に音楽を構築させる素材

【厳密には明確な定義・分類はされていない】

旋法：メロディーの流れを前提に音楽を構築する素材

教会旋法… ピアノの白鍵 (C~A) だけで1oct並べたモード。移調可能。

## ▶ イオニア旋法 (=メジャースケール)



=テノール音 (旋法における属音)

## ▶ ドリア旋法



## ▶ フリギア旋法



フリギアのみ第6音がテノール音。

(第5音でドミナントを作ると減5度が形成されてしまう)

Check!

## ▶ リディア旋法



## ▶ ミクソリディア旋法



## ▶ エオリア旋法 (=ナチュラル・マイナースケール)



## ▶ ハーモニック・マイナースケール



## ▶ メロディック・マイナースケール



上行形

下行形

## 3つのマイナースケール

調号通りのスケール、旋法として活用

主にマイナー調コード作成用のスケール  
(第7音を導音処理)

主にマイナー調メロディ作成用のスケール  
(導音処理の結果生じた増2度の解消)

# # 実践課題



譜例11,12で活用されている教会旋法は何ですか？

🔊 譜例11 ♪I.Stravinsky : バレエ音楽「火の鳥」第2場より抜粋  
mc14

A.

🔊 譜例12 ♪M.Ravel : 歌劇「子供と魔法」より抜粋  
mc15

Step up !  
2種のスケールの衝突効果

A.



## <「古い」けど「新しい」？>

教会旋法というのは現在主流の「メジャー・マイナーキー」の概念が確立する以前に、主に教会で使われていたもので、数種類の旋法の中から結果、「イオニア」と「エオリア」が生き残ってきました。

リディアを除いては、第7音が導音化されていなかったり、教会旋法を使用すると、俗に言われる「アルカイック」な趣きを醸し出すことができます。ただ、19世紀後半以降の作曲家は、逆にこの雰囲気新しい響きの要素として積極的に自作に活用してきたのです。まさに「温故知新」ですね！

Column